

富貴堂

1898~2003年

田原 洋朗

「富貴堂は、北海道の中央官
 札幌にあり、あまねく内
 の書籍・楽器・文房具・運動
 機に至るまで、すべて教育
 必要の機関を最も低廉に最
 迅速に全道に供給するを使
 と信じ、事業の発展に伴い、
 益なる図書を発行して、顧
 の殊遇に酬いん事を期す」
 今からちょうど100年
 、「1913年（大正7年）
 発行された「内村先謙領
 」（内村鑑三、札幌農科大学
 基督教青年会編、東京・警
 社書店／札幌・富貴堂書店）
 末に、この標語が掲げられ
 ている。

富貴堂は、1898年（明治
 年）創業、2003年に閉店
 た札幌の書店で、明治大正
 昭和平成にまたがる105
 の間に、一書店としてたけ
 はなく、地方出版の担い手
 として、また文化振興の拠点
 として、歴史をかたちづく
 きた老舗中の老舗だった。
 幌近郊にお住まいの大好き
 方には、また記憶に新しい
 別の本屋がもしないか？
 創業者中村信以は、1877
 年京都の生まれ。初めて北

1913年3月15日の北海タイムスに載った「富貴堂の新着」



1913年12月13日の北海タイムスに「富貴堂の新着」とともに載った当時の富貴堂の外観

100年前の目録広告



たはら・ひろあき 58年宗谷管内尻町生まれ。高
 校時代を札幌で過ごし、専修大卒業後、大阪での会社
 勤めを経て、コンテツの企画制作販売を行う有限会
 社ブックストップスを設立。現在は、インターネット
 古書店の運営・手製本の制作も手掛ける。札幌在住。

北海道を訪れたのは93年。渡道
 後、近江長浜出身ですぐに油
 屋を営んでいた「大丸藤井」
 創業者の一人藤井太三郎のも
 とで修行を重ねた。熱心で敬
 虔なクリスチャンであった藤
 井の影響を強く受け、信以は
 自らもキリスト教に入信。内
 村鑑三らが創設した札幌独立
 教会での受洗だった。
 太三郎の教えは「商売はも
 うけよ」と考える前に、ある
 12日に狸小路3丁目自賃本屋
 を開いたのが富貴堂の始まり
 である。
 1906年、富貴堂は南1
 条西3丁目に移転する。現在
 札幌ハルコが建つその地は、
 札幌の商業の発祥地ともいう
 べき。一流店が軒を並べるこ
 とで「巨商街」と呼び習わさ
 れた。「札幌一番街」の一角
 だった。
 1913年2月からは「北

当時の書棚正確に再現

所からない所へ、「日」早く、
 一銭でも安く届けて、客の便
 宜を計ること」であったと、
 富貴堂3代目信以の孫の中
 村康は連載記事「本」富貴堂
 （北海タイムス、1981年
 7〜8月）の中で述べている。
 その信以が、札幌を永住の
 地と定め、藤井商店からの独
 立を果たし、1898年3月
 12日に狸小路3丁目自賃本屋
 を開いたのが富貴堂の始まり
 である。
 1906年、富貴堂は南1
 条西3丁目に移転する。現在
 札幌ハルコが建つその地は、
 札幌の商業の発祥地ともいう
 べき。一流店が軒を並べるこ
 とで「巨商街」と呼び習わさ
 れた。「札幌一番街」の一角
 だった。
 1913年2月からは「北



「ブックストップス田原書店 古書目録 第4号」（左）と第5号に掲載予定の「富貴堂の新着」の原稿

ちようと100年後に、その
 目録広告を見つけてしまった
 奇縁を思い、自分の作る目録
 の中にこれを再現してみよう
 と思いついた。そして4月、
 当時の「富貴堂の新着」を付
 録として収録した、「ブック
 ストップス田原書店 古書目
 録 第4号」を発行した。
 「富貴堂の新着」には「此
 広告を纏めて書籍目録とせら
 れたし」（毎土曜掲載）、「札
 幌南一条西三 電話二五七
 振替東京一七三三」などの表
 記があり、十数冊の新刊書の
 題名、著者名、出版社名、商
 品代金、送料が掲載される。
 それをベースに、私を知りう

の「目録の目録」製作を
 通じて、漠然とした概念でし
 かなかった「100年前」が、
 今現在と変わらぬ側面を持っ
 た「つい最近」と感じられる
 ようにもなった。内地の各所
 から配送された本が札幌の一
 書店の書棚に納まり、それを
 薦めて売る人と興味を持って
 読む人と購う人がいて、商
 売と文化活動と日々の生活が
 続いている。なんの変り方が
 あるのだろうか、と。

1913）
 掲載されている本のほとん
 どはまったく未知の書籍だっ
 た。しかしながら、インタ
 ネット検索の工夫を重ねれば、
 その存在に辿り着けない
 本もまたほとんどない。自分
 自身の知識の無さに古書店主
 失格ではないかと自問しながら
 も、100年前の札幌の新刊
 書店の書棚をより正確に再
 現していく作業は、興味深く
 面白いものだった。

富貴堂

1898~2003年

田原 洋朗

富貴堂の創業者中村信以は、勤勉実直な努力の人であったと同時に、目録広告に垣間見られるように、先取性・先見性に富んだ挑戦者でもあったのだろう。

1901年（明治34年）には、出版事業を始めた。「北海道旅行唱歌」が初めての出版物で、「当時、唄われた鉄道唱歌に刺けきされたものだ」と、師範学校国語科教師、石森和男（電話作家石森延男の父）の作詞、音楽教諭玉瓶也の作曲になるものであった。中村康「本と富貴堂」の中に記されている。

以後35年（昭和10年）頃まで、書籍販売と並行して出版事業が続く。北海道周辺地区、観光絵がき、開拓や兵營の手引、受験問題集から、内村鑑三「内村先生講義集」、イギリス人宣教師でアイヌ文化研究者ジョン・パチエラーのアイヌの伊弉物語」まで、多種

出版、音楽にも創業者情熱

<下>



富貴堂の創業者・中村信以
（『七十年のあゆみ 富貴堂小史』より）

く。
黒澤明監督作品の音楽を多く担当した早坂文雄（北海道出身）も、富貴堂楽器部の常連であり、田上と早坂は、札幌新交響楽団で、指揮者と楽団員として邂逅することになる。

「地平切り開く」先取の心

このように、いまだ開拓地の色を強く残していた北海道で、信以が持ち合わせた開拓者精神は、富貴堂という一大ブランドを生み、その存在は札幌・北海道に大きな実りを与えた。

戦前の早い時期には、富貴堂主催の音楽会も数多く開催された。藤原歌劇団を創設したテノール藤原義江の「帰朝独唱会」と銘打った演奏会が行われたのは、27年9月のこの災直後に東京から札幌へ渡り、偶然出会ったパチエラー師の紹介で、まず音楽家として、富貴堂で随でバイオリン教授を始める。やがて、フランク・ロイド・ライトの元で建築を学んでいたと知れると、富貴堂の一大顧客であった医師関場不二彦の邸宅を設計することとなり、建築家として、富貴堂と大きな実りを与えた。

信以の死から6年後の68年、富貴堂は創業70年を記念し、「七十年のあゆみ 富貴堂小史」を発行する。くしくもそれは、明治100年・北海道100年を記念する年だった（ちなみに「富貴堂」の表記には「富」と「富」の両方があり、目録広告でも混在している。70年史は「富」だが、閉店当時の社名は「株式会社富貴堂」である）。

「七十年のあゆみ」発行からわずか7年後の75年、南1条西3丁目「札幌ハルコ」ビルが新築され、富貴堂は自社ビルを失う。「テナントとして営業を続けていた77年、ハルコの完全子会社となり、約四半世紀後の2003年に「ハルコブックセンター富貴堂」という名のもと、閉店の日を迎えるに至った。

社、祖父・父・子3代が協力して経営に当たったという。52〜67年にかけての15年ほどが、富貴堂の経営的な隆盛期ともいへべき時期だったらしい。売り上げが約束されている教科書供給所としての業務を収益ベースに、東京以北の文化センターの地歩を固め、会社組織の近代的改組、売り場拡張と新店開店を続けている。その間、信以は開拓功労者として表彰され、富貴堂は出版物小売業界内で全国的な役職を歴任していく。

しかし、札幌の老舗として安定した営業を続けているかどうか。

2013年は、札幌の老舗書店閉店の報道が相次いだ。富貴堂消滅から10年、この間のインターネット販売の進展を考えれば、当然の成り行きかもしれない。小規模・小商圏での書店業はもう成り立たないのではと予測せざるを得ない。と同時に、この時代に信以が生きていたら、何をどうするだろうと思わずにはいられない。そして自問する。札幌の書店主として、自分は信以ほどの情熱とアイディアをもって、事に当たっているだろうか。

100年前の信以が夢想だにできなかった今をわれわれは生きている。一つ確実に言えることは、今がそうであるように、われわれから100年後も誰かが、本を読んでいるということである。その本がどんな形であれ、場所が札幌であれ世界のどこかであれ。

その100年後の読者のために、信以の精神に倣い、日々の営業を続けていくことにしよう。冒頭に掲げた北海道の地平を切り開いていこうという信以の富貴堂標語に呼応して、100年後にも読む価値と製本の質を兼ね備えた本を選書し続けるしかあるまい。「目録の目録」を作る旅はこれからもまだまだ続く。（たはら・ひろあき「ブックスペース代表」）